慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	都市にはさまざまな表情があり、魅力がある：ホルヘ・アルマザン准教授に聞く
Sub Title	
Author	平塚, 裕子(Hiratsuka, Yuko)
Publisher	慶應義塾大学理工学部
Publication year	2019
Jtitle	新版 窮理図解 No.31 (2019. 10) ,p.4- 5
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	インタビュー
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001002-00000031-0004

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

インタビュー

ホルヘ・アルマザン准教授に聞く

都市にはさまざまな表情があり、魅力がある

幼い頃から、都市に興味があったというアルマザンさん。国境を越え、いろいろな都市を巡りそこに住んで、研究してきた。日本の建築デザインに強い憧れをもち、15年前に研究生として来日。グローバルな視点から、日本の都市研究に新たな光を投げかけてきたが、さらに今、地方都市を舞台にユニークな空間を創り出し、注目を浴びている。

――どのような子ども時代を過ごされましたか。

絵を描くことと読書が大好きでした。アート好きな少年で、映画（ショートフィルム）を作ったこともあります。毎日絵を描いていたかったので、芸術（アート）の道に進むことも考えたのですが、社会や人と関わりたいという気持ちが強く、最終的に建築を選びました。

――大学ではどのような勉強をされましたか。

私が進学したマドリード工科大学は、18世紀に開校した工学と建築学を専門とする2つの技術学校が1971年に合併してできた大学で、これまでに多くの優秀な建築家を輩出してきました。日本のシステムと違って、大学の課程は7～8年かかりますが、修了時には建築士の資格を得ることができます。ここで建築学の専門的な基礎をしっかり学びました。

在学中に1年間、ドイツのダルムシュタット工科大学に留学しました。ダルムシュタットは、ドイツのアール・ヌーヴォーと言われる、ユーゲント・シュティール様式の建築で有名な都市です。

――その後、日本にいらっしゃったのですね。

ダルムシュタットでドイツの建築や都市について学びましたが、ヨーロッパ以外の建築に触れてみたいという思いがありました。日本の建築家は世界的にも人気があります。丹下健三、黒川紀章、安藤忠雄、伊東豊雄、妹島和代（せじま）など、世界の若手建築家たちの多くは彼らの作品に学んでいます。日本のみなさんはどれだけ意識をされているかわかりませんが、日本の建築デザインは世界でトップクラスです。

――日本の都市にどのような印象をもたれましたか。

一番驚いたのは、公共空間が少ないことです。ベンチがないし、広場もない。「なぜ日本には広場がないのか」。日本人の研究者に尋ねたところ、多くは「文化の違い」という答えでした。「日本人には戸外の広い空間ではなくて、室内が向いている」というのですが、浮世絵を見ると、江戸時代の日本橋は随分にぎわっているじゃないですか。ある人に「蚊がいるから」とも言われましたが、蚊なら、スペインにもイタリアにもいるわけですし（笑）。

ヨーロッパの街を観光している日本人たちは、オープンカフェを楽しんだり、広場でくつろいだりしているように見えます。日本に広場がないのは文化的な問題ではないのではないか、というのが私の考えで、それが横浜赤レンガ倉庫前の広場の実験につながっています（2ページを参照）。

――最近手掛けられている一連の地方都市でのプロジェクトでは、公共空間に広場の行動デザインを取り入れていらっしゃるように感じますが…。

グローバルな手段によってローカル性を実現しようとする“グローカル”というコンセプトがありますが、私はいろいろなローカル性から学ぶという意味で、“トランスローカル”という言葉が好きです。

「旧二葉屋」のプロジェクトでは、故郷のアリカンテで学んだ広場空間というローカル性を、山梨という別のローカルにもってきました（3ページを参照）。山梨という場所には、地元に材料があり、職人さんがいる。その材料を利用し、技術を生かすように、コンセプトを考えます。けれどもそれだけではなくて、ローカルとローカルの間で学ぶ（learning）姿勢で考えていると、トランスローカルについてのインスピレーションを得ることができます。

素材は日本の伝統的なもので構成されていますが、そこで展開されるプログラムには地中海的な考え方が見られる。日本だ

からこうでなければ、スペインだからこうでなければ、と狭く考えるのではなくて、１つの空間にいろいろな可能性が開かれていていいと思うのです。

――教員として、慶應義塾大学の印象はいかがですか。

理工学部にはやさしい文化があるみたいです。やっぱり人間関係ですね。事務部門の方もほかの教員の方もとてもやさしいです。このような関係がなかったら、外国人の教員はやっていくのが難しかったと思います。

また、研究をしていて実感するのは、慶應義塾大学の社会における信頼性の高さです。公共団体や市民団体をはじめ、いろいろな方々に初めてお会いしても、大学名を出すことで、きちんと話を受け止めてもらえます。

――建築を目指す若い人たちに向けてメッセージをお願いします。

自分の情熱を育てることはとても大事です。何か好きなことがあれば、時間をかけてそれを磨いてください。そこから自分の研究テーマを見つけたり、デザインスタイルを発見したりできるのです。

建築はアートよりも明確な社会性があります。お金もかかりますね。ですから、学生であっても社会の一員としての責任と自覚が必要です。それぞれが情熱をもって社会に貢献する建築家になってほしいです。

◎ちょっと一言◎

学生さんから：

● 日本の歴史や都市計画について日本人よりも詳しいので、初めはとても驚きました。私たちが当たり前と感じて見過ごしていることを、海外の新鮮な目で指摘をしてくださるので、新しい発見があります。世界のいろいろな都市との比較もわかりやすく説明してくださり、日本の都市について、広い視点から考えることができます（博士３年生）。

（取材・構成　平塚裕子）

さらに詳しい内容は
https://www.st.keio.ac.jp/education/kyurizukai/

社会とのかかわりのなかで、自分の情熱を育ててほしい。

ホルヘ・アルマザン

Jorge Almazán

スペイン、バレンシア州アリカンテ市で生まれる。2003 年マドリード工科大学修了。2001 年ダルムシュタット工科大学留学。東京工業大学で博士の学位を取得。2008 年ソウル市立大学建築学科客員教員。2009 年より慶應義塾大学に勤務し、現在は准教授。建築デザイン研究室「スタジオラボ」を運営し、建築設計と研究の双方を複合的に扱いながら活動している。